

笑説
怯
善
者
の
人
々

長
谷
川
寺



笑説 法善寺の人々

長谷川幸延

笑説法善寺の人々

五五〇円



昭和四十年十月二十五日印刷
昭和四十年十月三十日発行

著作者 長谷川幸延

発行者 角谷奈良雄

発行所 株式会社東京文藝社

東京都新宿区弘方町一

振替・東京二一七五七

電話・(三六)二五五〇

はしがき

笑説——と冠させたのは、小説というほど、書く方も読んでもらう方も、肩肘はらないでというつもりである。

これは、はじめ、読売新聞の大阪文化部と、話の性質上、大阪ローカルという事で成り立ったのだが、東京の方で

「此方へも掲載する」

という好意を示され、全国版で出発した。

それだけに、こうした大阪の芸界の約束を分って貰う事で精いっぱいのところもあり、歯掻ゆい次第だ。それでも、こういう著作の皆無といえる大阪志の中に、こんな梗概めいたものでものこしておくのも、多少の役に立つかと思っただけの仕事である。

ただ、まとめて眼を通すと、少し「筆者」なるものが顔を出しすぎるようで面はゆい。が、それだけのしく仕事をしたのだと御了察いただきたい。

よい機会を与えてくれた読売新聞の伊藤文平(大阪)文化部長、谷村錦一(東京)娯楽部長や、その係りの人々の親切な助力。よい挿画と装幀も引うけてくれた下高原健二氏にも、

お礼をいわねばならない。そして、新聞と、この本の、多くの読者にも――。

校了の日

長谷川幸延

笑説
法善寺の人々

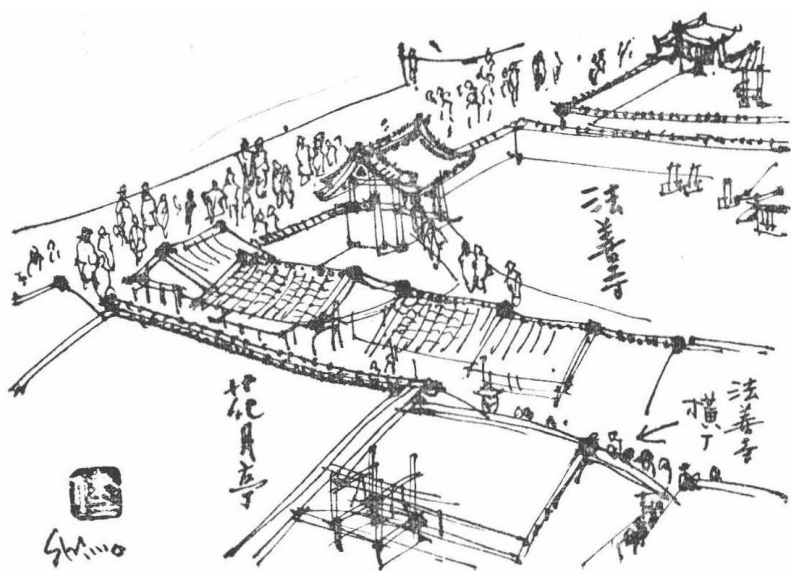
目次

横丁の春	セ
千日前	ニ
夜店・見世物	三
花かんざし	四
勘七の死	五
水かけ不動	六
文枝の四天王	七
桂・三友	八
三軒長屋	一〇
立川文庫	一一
楽天地	一二
五色の酒	一三
今井と天牛	一四
法善寺裏	一五
あるパイロット	一六
吉本の進出	一七
吉本せい	一八

花月・紅梅亭	二〇一
円馬のこと	二〇三
三木助と小文治	二二三
染丸と松翁	二三
松鶴のこと	二二九
春団治拾遺	二四二
九里丸のこと	二五二
新しい波	二六三
エンタツ・アチャコ	二七三
漫才学校	二八六
雌雄を決す	二九七
春団治の死	三〇〇
昭和十四・五年	三〇九
織田作のこと	三一七
横丁考現学	三四三
灯消ゆ	三四三
人名索引	三五二

装幀・挿画 下高原健二

横丁の春



法善寺といつても、もはや寺そのものを意味しない。新橋・柳橋といつても、橋でなく通じると同じである。

「エッ。ここ、寺か？」

「なるほど」

そういわれて気がつくほど、ここを寺の境内として通る人はまずあるまい。

心齋橋筋とつらなつて、大阪一の商店街を構成し、橋筋の愛称でよばれる戎橋筋と、これまた大阪一の歓楽街である千日前とをつなぐ境内の石だたみ。そして、それと平行するいわゆる法善寺横丁。それらを包含して法善寺——、それももう、一つの愛称である。

ともに百五十メートルあるかないかの短い、狭い小路である。が、通行のはげしさからいえば、これまた大阪一ではないか。

それにしても、法善寺と道頓堀の中間に、平行しているこの路を、法善寺横丁というのはあつていない。かりそめに小説の題名としてつけたのが、そのままはやつて通り名になったのだが、ここは古くは法善寺裏といった。その方が正しい。

ある友人がいった。

「正確にいつて、法善寺横丁とよぶべき路は、ほかにある」

と。が、今それをここであげつらう事は、話のまくらを重くするから、やめる。

それよりも、あの物静かで、しかもはなやかだった法善寺裏のたたずまいが、今のこの法善寺横丁の繁栄……というより、すさまじい混雑に変貌しようとは。

その時分でも、ここには二つの落語の席（大阪では寄席よせといわない）を中心に、料理屋の数は現在とは比べられないが、それでも川柳に

十五軒あるとは見えぬ法善寺

と、そのくらいはあった。

幅二メートルほどの横丁。その板石の路は、いつでもしつとりとぬれていた。両側の店の灯が映ると、それは細い川のように見えた。その板石が、正月の元日と二日だけはかわいていた。

しめ飾りだけははでにするが、門松は二軒の席だけ。他は入り口の柱に小松を水引きで結んだ。路が狭いからである。

そのかわいた板石を、今、かわいい男の子が二人、肩を並べて歩いて行く。ひわと紫、色こそちがうが袂の長いのし目に、つい羽織を着ている。人形のような。だれもが

（あ、歌舞伎の子役さんや）

と振り返った。

それが今から四十年前、子役とよばれる少年たちの風俗だ。

大阪人は、道頓堀から千日前へかけて一帯の歓楽街を、今でもミナミとよぶ。

「どこ行きです？」

と、たずねられて

「ちよつとミナミへ……」

そう答えるとき、まことに楽しそうだ。

そこはかつて、大阪市の南に位置した。が、北を淀川で断たれている大阪は、しぜん南へ伸びて、

大和川で堺市と直面している。だからミナミはもう南でなく、市の中心である。が、それでも今なおやっぱり

「ちよつとミナミへ……」

である。ミナミよりさらに南の住吉へんからでも、ずっと西の九条・築港へんからでも

「ちよつとミナミへ……」

「おたのしみ」

と、うらやまれる。

ミナミはすでに地理的の意味をもたず、その中にあらゆる見るもの、食べるものをちりばめ、さらに宗右衛門町を代表とする南地五花街（昔ほどではないが）の華麗さでいろどった、いわば大阪の、あらゆる享樂のメッカという愛称である。

そして、昔からその中の一色彩であつた法善寺横丁。

今の物すごさに比べると、そのころのここは、優にやさしい静けさであつた。法善寺の西門の入り口にあつた料理屋の、みどりの座敷でのといて、百五十メートルはなれた東門の外、千日前播重はりじゆうの席でひく娘義太夫の三味線が、ふと聞こえてくるほどであつた。

今は、いちばんはやっている正弁丹吾の店で、大入りの客の中に友だちを見つけ

「山田君！」

とよんでも、てんで通じないほどである。

現在、そういう店はほとんど会社勤めの人々のひけあとがねらいだから、日曜を休む。たいてい第一、第三を休むのは、月末はあたたかいふところを期待して休まないからだろう。

そのころのここは、店によつて休日をきめ、日曜ものれんをつつた。全体が休むのは正月の元日と

二日。それでも紅梅亭・花月二軒の落語の席と、入り口に飾ったおたやん（お多福）の人形で名高い夫婦ぜんざいだけは、元日から休まずにフタをあけていた。

対の、のし目を着た二人の少年俳優は、ちよつとささやき合うと

「……」

ニッコリと、夫婦ぜんざいののれんをくぐった。

お福さんという名でよばれた人形、夫婦ぜんざいのそのおたやんは、たしかに法善寺横丁の異彩だった。

夫婦ぜんざいは、今では蝶々・雄二の専売のようになつたが、この横丁では古いのれんだ。落語の席が二軒、花宗という小間物屋が一軒、他はほとんど酒と料理の中に、湖月と共にたつた二軒の甘いもの屋であつた。湖月は早く姿を消し、夫婦ぜんざいだけが甘党の本陣としての存在であつた。

何しろ、よその店なら一杯五銭のぜんざいを、浅いながらも二杯の椀に入れ

「夫婦一組みてっせ」

二杯五銭で出したのが、勘定高い大阪人の好みに合つた。しかも、わざとお盆の上へ三盆白（砂糖）を少しこぼしておくのを、客は指でなめて

「ええ砂糖使うてよる」

それも気に入って、いつもはやつた。

その夫婦ぜんざいののれんを二人の少年がくぐつてから、間もなく

「えらいこっちゃ」

地つづきの道頓堀、中座の樂屋の頭取部屋へ

「今そこで、子供が二人よって仲のええ夫婦を、夫婦別れさしよった……」

「……？」

そういつて飛び込んで来たのは奥役の高橋元太郎である。

奥役というのは芝居道の名で、松竹の会社と俳優の間に立ち、配役・給金の事など円滑にはこぶ仕事をいう。高橋は腕も立ち、社長の白井松次郎という大プロデューサーの、アシスタントとしても功があった。

高橋は、二人が夫婦ぜんざいへはいるのを見て、ソツとのれんをかかけると、二杯一人前のぜんざいを、二人で仲よく一つずつ食べていた。夫婦ぜんざいを二人で分けた。それを

(夫婦別れ……)

と、しゃれていったのだ。

「だれだす？ そんな罪なことをするのは？」

芝居者らしく、だれかが調子よく水を向けると

「それが、うちの子役さんや」

「末恐ろしいなア。だれとだれや？」

「成駒屋（先代鷹治郎）のこの長丸さんと、高島屋（市川右団治）のこの右一っあんや」

「……」

林長丸。市川右一。——とだけでは、おわかりにはなるまいが、それが二人の少年俳優の芸名である。

その二人の少年に、四十余年の歳月と努力が輝かしいライトをあて、映画界の王座へ押し上げてし

まった。

一人は市川右太衛門として一足早くカメラに立ち、つづいて一人は林長二郎から、長谷川一夫へ。母・嫁・娘「三代の恋人」への道へ出発したのだ。

その四十年の歲月は、敗戦時代の混乱を中心にして、あのお福さん（人形）の身の上にも、随分はげしい変遷がある。

昔、夫婦ぜんざいの店は、法善寺境内の藤の棚の下に、茶店風にしてあった。亭主は竹本繁太夫という淨瑠璃の太夫で、お福さんはまだいなかった。これは店を法善寺横丁へ移す時「何んぞ、まねき人形がないと形にならん……」

と考え、八幡筋の古道具屋で見つけた骨董品だ。そういえば招き猫の形に似ている。

夫婦ぜんざいは、織田作之助が同名の小説に書き、森繁久弥で映画化したのが当たり「頼りにしてまっせ」

という森繁のアドリブが、いわばキャッチ・フレーズになって有名になった。

が、川口松太郎がその「芸道一代男」の中に使っているのとどっちが先だったか。たしかこの方は藤の棚の茶店の方で、初代中村鴈治郎がその父翫雀と邂逅する場面に用いていたと思う。

それにしても、そこから移った地の利と、時期がよかった。明治の末で、この横丁には原田の席（のちの紅梅亭）と金沢の席（花月）の二つの定席のほかには二、三軒のみ屋があっただけ。それが日露戦争のあとと、第一次世界大戦のあとをうけた好景気で、たちまち一つの食傷街に発展した。

二鶴・正弁丹吾・鶴源・お多福などのなつかしい店は、たいいていそのころの誕生である。

ことに夫婦ぜんざいは、場所がよかった。その横丁の中央、二つの席のまん中である。しかもそこは、その横丁から道頓堀へ抜けうるただ一つの露路の角にあたる。

ここから法善寺の境内へ抜ける路は三つあったが、道頓堀へ抜ける路は一つしかなかった。夫婦ぜんざいは、その咽喉を扼したのである。

この路は現在、人一人やっと通れる程度だが、当時は西に中座の塀から舞台の囃子がきこえ、東側はいけますなどの小料理屋が趣きをそえていた。

奥役の高橋元太郎が、筆者に

「君。正しい法善寺横丁は……」

といったのが、この小路だ。

高橋元太郎は、筆者の先輩である。ともに芝居の作者たらんとして、大阪の劇界に重きをなした食満南北の門をたたいた。が、彼は途中で転向し

「名よりも実や」

彼のいう実とは、金の事であつたらしい。

戦後早く死んだが、生かしておけば財も成し、松竹の重役は太鼓判であつた。その高橋が

「法善寺横丁は、ここや」

といったのは、正しい。

横丁という以上、法善寺に対してT字形をなしているべきだし、道頓堀へ抜けられるというのも色彩だった。彼はまた

「しかし君。大阪に横丁というのではないぜ。大阪流にいうなら法善寺横町や」

これは郷土史家牧村史陽など口をきわめていい、書きもした。が、大阪にも以前から、鴈治郎横丁（千日前溝の側）や、軍艦横丁（ジャンジャン横丁の旧名）などがある。もしも法善寺横町だった